

[特集：国際フィールドワーク]

## 愛知大学国際コミュニケーション学部生の 海外経験と海外活動希望：

「国際フィールドワーク」の魅力拡大のために

Overseas Experience and Desire of Students Belonging to Faculty of International  
Communication, Aichi University:  
For Increasing Appeal of “Overseas Fieldwork”

加納 寛

KANO Hiroshi

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: kano@aichi-u.ac.jp*

### はじめに

愛知大学国際コミュニケーション学部では、1998年度の学部開設当初から、「国際フィールドワーク（旧・比較文化フィールドワーク）」を学部の特色の一つとして重視してきた。1名の教員が15名程度（10名以上）の学生を引率して国外において15日間の海外調査実習を行うこの科目は、1999年度のタイにおけるフィールドワークを皮切りに、2000年度からはタイ・韓国・中国において展開され、順次アメリカ、ドイツ、イギリスと、その活動の場を広げてきた。しかし、その一方、2005年ころから科目履修希望者の減少が顕著に見られるようになり、この状況にはなかなか歯止めがかからない。たとえば、タイは2004年度の実施を最後に、その後は履修希望者が最少催行人員である10名を下回って実施できていない<sup>1)</sup>。ドイツも科目開設時の2012年度には多くの履修希望者があって実施で

1) 愛知大学の授業科目としての「国際フィールドワーク（タイ）」が履修希望者不足で実施できない場

きたが、その翌年には早くも履修希望者が集まらず開講取り止めとなった。こうした状況は、他の「国際フィールドワーク」科目においても同様にみられる。

大学展やオープン・キャンパス、推薦入試の面接会場では、多くの入学希望者が「国際フィールドワーク」への参加希望を表明し、「国際フィールドワーク」履修のための先修科目<sup>2)</sup>である「フィールドワーク入門」には1学年100名以上の履修者があるにもかかわらず、なぜ実際のフィールドワーク科目には学生が集まらないのか？ 本稿は、2013年度「フィールドワーク入門」講義において履修生に対して実施したアンケート調査に基づいて、国際コミュニケーション学部生の海外経験と海外活動希望についてその特徴を把握することによって、「国際フィールドワーク」科目の魅力を増大させる方法を考えたい。

## 1、アンケート調査の概要

本アンケート調査は、2013年度春学期「フィールドワーク入門」の講義の一環として、2013年6月5日に受講生を対象に実施した<sup>3)</sup>。国際コミュニケーション学部の専門科目である「フィールドワーク入門」は、「国際フィールドワーク」を履修するためには必ず履修しておかなければならない1学年向けの先修科目であり、この受講生中からフィールドワーク参加者が募集される。2013年度においては166名の履修登録があり（1学年141名、2学年以上25名）、本調査に対する回答者は118名であった。

調査票の内容は、回答者の属性（母語・性別・所属学科・学年・第2外国語・出身高校・入試種別）を問う第1部と、回答者の海外経験（海外旅行・海外留学の有無とその時期・渡航先）を問う第2部、そして将来における海外活動希望（海外旅行・フィールドワーク・海外セミナー・海外留学への希望の有無とその理由）を問う第3部から構成されるA3紙片面1枚のものであった。第1部・第2部、および第3部の海外活動希望の有無については選択式の回答であり、第3部の各海外活動希望・不希望の理由のみ自由記述式

---

合、筆者は東南アジアでのフィールドワークを希望する学生に対し、東京大学を中心に組織されているアジア農村研究会が毎年3月に実施する海外フィールドワーク実習への参加を勧め、2000年代後半までは愛知大学からも多くの学生がこの実習に参加していた。しかし、近年ではアジア農村研究会のフィールドワーク実習に参加を希望する学生も皆無になってしまった。かつてこのフィールドワーク実習で海外調査について学ぶ貴重な機会をいただいた筆者としては、非常に残念である。なお、アジア農村研究会の海外フィールドワーク実習については、アジア農村研究会編（2005）を参照されたい。

2) 「国際フィールドワーク」を履修するためには、必ず先修科目である「フィールドワーク入門」を履修しなければならない。ただし、「フィールドワーク入門」を履修したからといって、「国際フィールドワーク」を必ず履修しなければならないわけではない。

3) 「フィールドワーク入門」は、「国際フィールドワーク」の担当教員が数名で担当するオムニバス科目である。担当者は交代で、それぞれの現地調査方法論や、各「国際フィールドワーク」実施内容を講義していく。

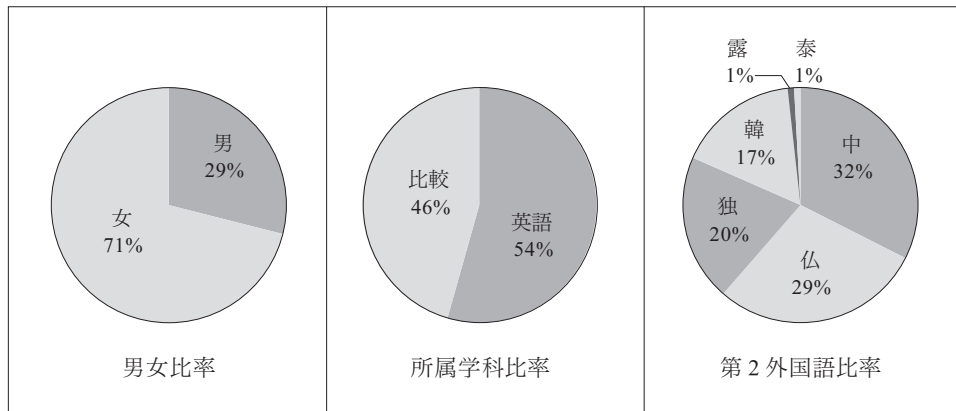


図1 日本語を母語とする回答者の属性傾向

回答とした。

回答者のうち、日本語母語者は114名、外国語母語者は4名（中国語3名、韓国語1名）であった。外国語母語者4名については、「海外」経験が当然に日本語母語者とは異なるため、以下、日本語母語者114名のみを分析対象とする。日本語母語者の属性としては、次のとおりである。性別については、女性81名（71.1%）、男性33名（28.9%）であった。学年については1学年98名（86.0%）、2学年以上16名（14.0%）、所属学科については英語学科<sup>4</sup>62名（54.4%）、比較文化学科52名（45.6%）、第2外国語については、中国語37名（32.5%）、フランス語33名（28.9%）、ドイツ語23名（20.2%）、韓国語19名（16.7%）、ロシア語1名（0.9%）、タイ語1名（0.9%）であった。出身高校については、公立高校出身者82名（71.9%）、私立高校出身者27名（23.7%）、無回答5名（4.3%）、出身高校の所在県については愛知県80名（70.2%）、岐阜県10名（8.8%）、静岡県10名（8.8%）、三重県9名（7.9%）、無回答5名（4.3%）であった。

## 2、学生の海外経験

まずは回答者の海外経験から見てみよう。

海外旅行経験については、日本語母語者114名のうち54名が「あり」（47.5%）、60名が「なし」（52.6%）と回答している。「国際コミュニケーション」を専門として学ぶ学生としては海外旅行経験者が少ないようにも思われるが、回答者のほとんどが入学後間もない1学年であることを考えると無理のない数値といえるであろう。1学年では98名中44名

4) 2011年度以前の入学生（3学年以上）は、学科名称変更以前の入学のため「言語コミュニケーション学科」所属である。

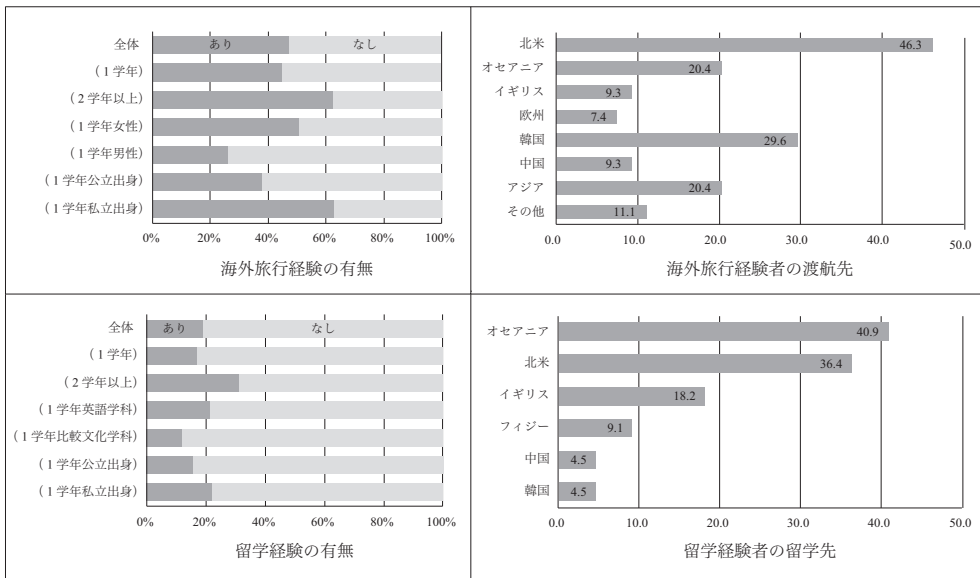


図2 海外経験傾向

が「あり」(45%)、54名が「なし」(55%)であるが、2学年以上になると16名中10名が「あり」(63%)、6名が「なし」(38%)となり、海外旅行経験が増加することがわかる。2学年以上の回答者の海外旅行経験時期を見ると、高校時代までの海外旅行経験については1学年とほとんど変わらないものの、大学入学後の海外旅行を経験した者が16名中5名(31%)となっており、1学年と2学年以上との差異の原因は大学入学後の海外旅行経験にあることがわかる。

海外旅行経験は、男女間でも大きな差が見られる。条件を一定にするために1学年同士で比較すると、女性75名中38名(50.7%)が海外旅行を経験しているのに対し、男性では23名中6名(26.1%)しか経験しておらず、女性学生に比して男性学生の海外経験の乏しさが際立っている。こうした大きな差は、学科間や第2外国語間では見られなかったが、出身高校別では、1学年のうちの私立高校出身者27名中17名(63.0%)が海外旅行経験をもつのに対して、公立学校出身者71名中では27名(38.0%)しか海外旅行経験をもたなかった。これは私立高校においてとくに顕著な、修学旅行の海外進出傾向に起因するものかもしれない。

渡航先については、海外旅行経験者54名のうち、北米(ハワイを含む)25名(46.3%)、オセアニア11名(20.4%)、イギリス5名(9.3%)、英語圏を除く欧州4名(7.4%)、韓国16名(29.6%)、中国5名(9.3%)、中・韓を除くアジア11名(20.4%)、その他6名(11.1%)であった。「その他」のうち多かったのはグアムと回答した者であった。ここから、おそらくハワイ・グアムといった太平洋のビーチ・リゾートに渡航経験を持つものが

多いであろうことがうかがわれる。中・韓を除くアジアに渡航した者については、シンガポールに渡航経験のある者が多かった。以上の傾向からみると、アジア・太平洋地域の英語圏への渡航経験者が圧倒的に多いことがわかる。英語圏以外への渡航先については、韓国が多いものの、それ以外の地域への渡航経験はきわめて乏しいことがわかった<sup>5)</sup>。

大学入学後の渡航先については、大学入学後のみに渡航経験をもつ4名の渡航先に注目すると、イギリス2名、英語圏を除く欧州2名、北米（ハワイを含む）1名、その他0名となり、渡航先が遠距離になる傾向があることが読み取れる。ただし、欧米圏への旅行が目立ち、国際コミュニケーション学部において柱の一つとされるアジアへの渡航が見られなかったのは残念である<sup>6)</sup>。「国際フィールドワーク」においてもアジアを実習先とするものが多いことから、学生の関心をよりアジアに志向させる工夫が必要であろう。

1か月程度の短期留学を含む海外留学経験については、留学生を除く114名中22名が「あり」（19.3%）、92名が「なし」（80.7%）であった。学年別に見ると、1学年では98名中17名が「あり」（17.3%）、2学年以上では16名中5名が「あり」（31.3%）と回答しており、2学年以上の回答者で留学時期を高校時代以前とした者はいないことから、今後大学生活が長くなるにつれて留学経験者比率が増加していくであろうことがうかがわれる。

海外留学経験については、男女差や第2外国語による大きな差は見られなかったが、出身高校別では、公立学校出身者71名に対して11名（15.5%）、私立高校出身者27名に対して6名（22.2%）と私立高校出身者の方が留学経験者比率が若干高く、さらに学科差としては英語学科56名に対して12名（21.4%）、比較文化学科42名に対して5名（11.9%）と大きな差が開いた。

留学先については、留学経験者22名のうち、オセアニア9名（40.9%）、北米（ハワイを含む）8名（36.4%）、イギリス4名（18.2%）、フィジー2名（9.0%）、中国1名（4.5%）、韓国1名（4.5%）、その他0名であった。旅行先以上に英米圏留学比率が大きくなったが、高校まで英語のみを外国語として学習してきた学生がほとんどであるため、当然の結果といえよう。なお、高校までに留学を経験した者の多くは北米とオセアニアを留学先としているのに対して、大学在学中の留学先としてはイギリスおよびフィジーを選択する比率が増大していることから、大学入学後の留学先選択は対象が広がっていることがうかがわれる。

5) なお、ここにも男女差は観察され、1学年のみで比較すると、オセアニア旅行経験者は男性26名の海外経験者のうち13名（50.0%）を占めるのに対して、女性51名中では7名（13.7%）に過ぎず、その一方、韓国旅行経験者は男性1名（3.8%）のみに対して女性は13名（25.5%）にのぼった。

6) 学部開設以来の学生たちと接してきた印象としていえば、近年とくに国際コミュニケーション学部生の欧米志向が強まってきているように感じる。実業界におけるアジア重視傾向は、必ずしも高校生や大学生には共有されないようである。

### 3、大学在学中における海外活動

こうした経験をもつ学生たちは、大学在学中における海外活動についてどのような希望をもっているだろうか？

海外旅行希望については、日本語を母語とする回答者114名中、「あり」が113名(99.1%)、「なし」が1名(0.9%)と、ほとんどの学生が海外旅行を希望していることがわかった。希望の理由としては、113名のうち、「他国・他文化への関心」が53名(46.9%)、「観光への関心」が34名(30.1%)、「語学力向上」が10名(8.8%、うち「英語力向上」は7名6.2%)、「外国人とのコミュニケーション」が9名(8.0%)であった。海外旅行を希望しない者については、理由の記載がなかった。

「国際フィールドワーク」参加希望については、114名中「あり」が91名(79.8%)、「なし」が22名(19.3%)であり、「国際フィールドワーク」への参加の条件となる授業の履修者としては、いささか「なし」が多いと感じられる回答であったが、実際に「国際フィールドワーク」に参加する学生については、経験上さらに少なくなっていくものと考えられる。男女間でも希望傾向の差異は観察され、1学年の女性75名中65名(86.7%)が「国際フィールドワーク」への参加を希望するのに対して、男性では23名中14名(60.9%)に留まり、女性の参加希望の方が高いことがわかった。

参加希望の理由については、参加希望者91名のうち、「他国・他文化への関心」を挙げる者が37名(40.7%)、「海外調査への関心」が34名(37.4%)、「外国人とのコミュニケーション」が5名(5.5%)、「語学力向上」が3名(3.3%、うち「英語力向上」が2名2.2%)、「大学企画のため安心」が2名(2.2%)、「期間が手頃」が1名(1.1%)であった。「語学力向上」や「外国人とのコミュニケーション」を挙げる者が少なかったことは、実際には「国際フィールドワーク」において展開される調査活動を通じて実践的な語学力の向上が見られる現実があることから、担当者としては残念であった。「国際フィールドワーク」に参加すれば、実践的語学力のより一層の向上や外国人とのコミュニケーション機会の増大が大いに期待できる旨のアピールをより心がけることが必要であろう。また、「海外調査への関心」を参加希望理由に挙げる者が40%未満に留まることは<sup>7)</sup>、「国際フィールドワーク」の意義が学生に浸透していないことを示すと考えられるが、この点を改善するために海外調査の意義をより深く理解させるための教育を徹底していくのか、それとも学生の関心に合わせて「国際フィールドワーク」の内容を調査的色彩の薄い文化体験型あるい

7) とくに男性学生の海外調査への関心は低く、「海外調査への関心」を理由として挙げている者は、1学年男性の場合は参加希望者14名中2名(14.3%)に留まった(1学年女性の場合、65名中25名(38.5%)に達している)。男性学生の「海外調査への関心」をより刺激する必要がある。

## 愛知大学国際コミュニケーション学部生の海外経験と海外活動希望

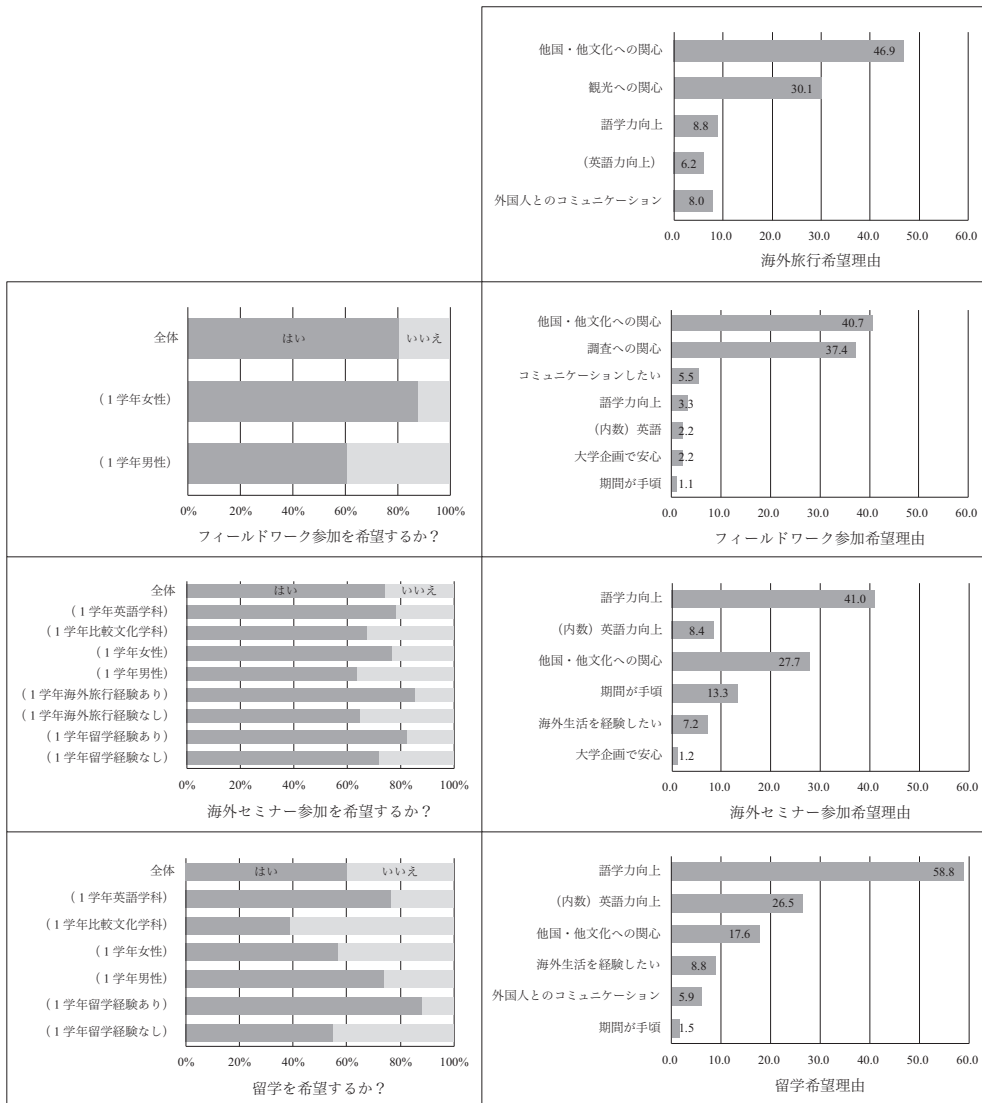


図3 大学在学中の海外活動希望傾向

は観光型のものにしていくのかについては、「国際フィールドワーク」科目の位置付けをどのようにしていくかにあわせて慎重な判断が必要であろう。

なお、「国際フィールドワーク」参加を希望しない理由については、参加不希望者22名のうち、「内容の不安」を挙げる者が8名(36.4%)、「資金の不安」を挙げる者が4名(18.2%)であった。「内容の不安」の具体的回答としては、調査実施に対する不安のほか、「事前・事後研修がきつい」、「自由に旅行した方がよい」、「語学力向上に結び付かない」、「フランスへのフィールドワークが存在しない」、といった内容があった。

「海外セミナー」参加希望については、114名中、希望「あり」が83名（72.8%）、「なし」が29名（25.4%）であった。1学年同士を比較すると、男女間では男性23名中14名（60.9%）が「海外セミナー」参加希望であるのに対して、女性は75名中57名（76.0%）と男性に比べて参加希望率が高かった。同様に学科間では比較文化学科が42名中27名（64.3%）に対して英語学科は56名中44名（78.6%）と英語学科の方が「海外セミナー」への参加に積極的であった。こうした差異は海外経験の有無によっても見られ、「海外セミナー」参加希望者は1学年で海外旅行経験を有する者44名中36名（81.8%）、有しない者54名中35名（64.8%）、留学経験を有する者17名中14名（82.4%）、有しない者81名中57名（70.4%）と、海外経験をもつの方が「海外セミナー」参加により積極的である傾向が見られた。

希望の理由については、希望者83名中、「語学力向上」が34名（41.0%、うち「英語力向上」は7名8.4%）、「他国・他文化への関心」が23名（27.7%）、「期間が手頃」が11名（13.3%）、「海外生活を体験したい」が6名（7.2%）、「大学企画のため安心」が1名（1.2%）であり、「外国人とのコミュニケーション」を挙げた者はいなかった。企画の趣旨通り語学力向上を目指す者が多いものの希望者の半数に満たず<sup>8)</sup>、海外旅行等でも多数を占めた「他国・他文化への関心」を挙げる者が3割程度存在することからすれば、本アンケートにおいて海外セミナー参加希望と回答した者の多くは、その欲求を海外旅行等で代替して満たすことが可能となるため、海外セミナー参加希望を容易に取り下げて海外旅行等に切り替えてしまう可能性を示唆するものと考えられる。とくに男性と比較文化学科に、そうした傾向がより強く観察された<sup>9)</sup>。

一方、海外セミナー参加を希望しない理由については、参加不希望者29名のうち、「資金の不安」が7名（24.1%）、「内容の不安」が5名（17.2%）、「期間が短すぎる」が5名（17.2%）、「期間が長すぎる」が2名（6.9%）であった。「期間が短すぎる」と回答した者は、全員が1年以上の留学を希望していた。また、「内容の不安」のうちには、「海外セミナー」という制度自体を知らないという者も複数あり、「海外セミナー」制度について、より徹底した周知努力が必要であることがわかった。

1年間以上の海外留学については、114名中、希望「あり」が68名（59.6%）、「なし」が45名（39.5%）であり、「国際フィールドワーク」や「海外セミナー」に比較して参加へのハードルが高いことがわかった。留学希望の有無については、男女差も見られ、留学

8) なお、語学力向上を理由として挙げた者のうち英語力向上を挙げる者が少なかった点からすると、「海外セミナー」は第2外国語力の向上を前提として考える者が多い可能性がある。

9) 男性の「海外セミナー」参加希望者14名のうち、理由を「他国・他文化への関心」とする者は7名（50.0%）に及んだ。また、比較文化学科の参加希望者27名中では、参加希望理由を「語学力向上」とした者は8名（29.6%）に留まった。



希望者は1学年男性23名中17名(73.9%)に対し女性では75名中42名(56.0%)に留まり、「海外セミナー」希望者の男女差とは逆の傾向が観察できた。留学経験の有無でも差異があり、留学経験者17名中15名(88.2%)が留学希望なのに対し、留学未経験者の場合は81名中44名(54.3%)に留まった。とくに顕著な差が見られたのは学科間であり、英語学科では56名中43名(76.8%)が留学希望なのに対し、比較文化学科では42名中16名(38.1%)と大きく差が開いた。

海外留学希望の理由については、希望者68名中、「語学力向上」が40名(58.8%、うち「英語力向上」は18名26.5%)、「他国・他文化への関心」が12名(17.6%)、「海外生活を経験したい」が6名(8.8%)、「外国人とコミュニケーションしたい」が4名(5.9%)、「期間が手頃」が1名(1.5%)であった。希望理由として「語学力向上」を挙げる者が多く、とくに女性の場合は留学希望者42名中30名(71.4%)に及んだ<sup>10)</sup>。しかし、その一方で、1年間以上の長期留学の醍醐味であろう海外生活の経験や外国人との交友関係の確立を含むコミュニケーション希望などは少数に留まっており、留学イメージが若干画一的であることが気がかった。

一方、海外留学を希望しない理由については、留学不希望者45名中、「期間が長すぎる」が24名(53.3%)、「資金の不安」が12名(26.7%)、「内容の不安」が2名(4.4%)であった。「期間が長すぎる」という回答が多いが、この中には「単位取得の不安」と「4年で卒業できなくなることへの恐れ」を挙げる者があった。

## 結びにかえて：「国際フィールドワーク」の魅力拡大のために

以上、2013年度「フィールドワーク入門」受講者へのアンケート調査に基づいて、愛知大学国際コミュニケーション学部生の海外経験と海外活動希望について観察してきた。その結果、約半数の学生が海外旅行経験をもつが、男性の海外旅行経験比率が女性に比して際立って低いことがわかった。渡航先については英語圏が目立った。海外留学については、2割程度の学生が経験しており、留学先は英語圏がほとんどであることがわかった。海外活動については、ほぼ全員が海外旅行を希望しており、「国際フィールドワーク」については8割程度が、「海外セミナー」については7割程度が、1年間以上の留学については6割程度が希望していた。その理由については、海外旅行については「他国・他文化への関心」を挙げる者が最も多く、「国際フィールドワーク」については「他国・他文化への関心」と「海外調査への関心」を挙げる者が、「海外セミナー」と留学については

10) 男性の場合は、留学希望者17名中6名(35.3%)のみが理由として「語学力向上」を挙げているに過ぎない。

「語学力向上」を挙げる者が、それぞれ多かった。

このような集計結果に基づいて、「国際フィールドワーク」の魅力を増大するためには、次のような方法が考えられる。

#### (1) 単なる旅行とは異なる「国際フィールドワーク」が進路開拓に結びつくことに関する理解の醸成

・海外調査を経験することが、異文化を理解し、異文化を背景とする人々とのより良いコミュニケーションを築くための訓練となって、学生の将来の職業と有機的に結びつくことを理解させる。

・「国際フィールドワーク」における海外調査によって、実践的な語学力向上が見られ、外国人とのコミュニケーション機会が増大し、またそれらを促す絶好の機会になることを理解させる。とくに、長期留学には期間的な面で躊躇が高い一方で語学力向上に強い意欲をもつ女性学生に対して、こうした理解の醸成を図ることは、「国際フィールドワーク」の魅力化にとって重要である。

・「国際フィールドワーク」が、海外での生活を実際に体験する機会でもあって、将来の海外生活のための助走となることを理解させる。

・とくに「国際フィールドワーク」が多く展開されているアジア各国について、現在の日本経済との強い関係性を学生に理解させ、現地調査を通じてアジアの生の姿に触れ、現地を理解することが自己の将来の進路を切り拓くことに明確に結びつくことを理解させる。

#### (2) 「国際フィールドワーク」科目自体の魅力拡大

・大学補助金等の存在により、15日間の海外渡航・滞在としては、かなり低い経済的負担で済むことを宣伝する。

・第2外国語としての履修者が多く、さらに激増しているフランスについて、「国際フィールドワーク」を立ち上げる。なお、フランスとは逆に、第2外国語としての履修者がきわめて限定されてタイについては、①国際コミュニケーション学部内のタイ語履修者を増加させる、②タイ語を履修していない学生が大部分になっても調査が実施できる体制を構築し周知する、の二つの可能性が挙げられるが、後者については海外現地調査を体感させるための「国際フィールドワーク」において妥協が困難であり、当面は前者を目指すべきであろう。

このような魅力拡大によって、より多くの国際コミュニケーション学部生が「国際フィールドワーク」に参加するようになり、海外の実際を肌で感じながら対象地域を理解する技術を身につけ、卒業後に海外との懸け橋となって活躍されることを祈念するもので

ある。

## 参考文献

- ・アジア農村研究会編（2005）『学生のためのフィールドワーク入門』めこん
- ・加納寛（2006）「国際コミュニケーション学部の海外フィールドワーク」愛知大学豊橋校舎フィールドワーク運営連絡会議編『フィールドワークによる探究能力の育成：愛知大学フィールドワーク教育の展開（2006年度愛大版教育 GP 事業報告書）』愛知大学豊橋校舎フィールドワーク運営連絡会議